

連載：原点

授業の難しさ

磯辺高等学校 古江 周作

私が教員として初めて教壇に立ったのは、産休の代替の講師として、10月の半ばからでした。着任した学校は、大半の生徒が就職や専門学校志望で、数学に対しての意欲の低い生徒が多くいました。そして、いきなり先生が変わり、戸惑いがあったと思います。特に抵抗があったクラスは3年生でした。自分にベテランの先生の代わりが務まるわけもなく、生徒を落ち着かせることができずに授業は無茶苦茶でした。苦痛の日々が続き、生徒が卒業するまでの授業回数をカウントダウンするような最低な教員でした。当時の生徒には、自分の力不足のせいで退屈で不毛な時間を過ごさせてしまって、本当に申し訳ないと思っています。

しかし、すべてが嫌な出来事だけではありませんでした。自分の授業を聞いてくれる生徒や問題が解けたときの生徒の笑顔に救われました。多くの生徒が小学校あるいは中学校のときに授業がわからなくなり、置いていかれてしまっていました。そのときの教頭先生からいただいた言葉の中で、強く心に残っているのが、「どんな生徒も勉強ができるようになりたいと願っている。」です。ある生徒が、「卒業する前に分数の足し算と掛け算の違いだけでもわかるようになりたい。」と言ってきたときに、その言葉の意味を強く感じることができました。私はこの経験から授業の大切さを学びました。

講師のときは、採用試験で合格するために、毎日のように数学を先輩の先生に教えていただきました。基本的な質問も多くて、呆れられていないか不安でしたが、合格するためはもちろん、どんな学校でも生徒の力になれるようにと思い、たくさんのことを教えていただきました。約2年間の講師経験を経て、やっと採用試験に合格でき、4月から初任者として磯辺高校で勤務することになりました。

磯辺高校は大学へ進学を希望する生徒が多い上、理系クラスを教えているため、受験に不利にならないように授業研究に力を入れています。先輩の先生に授業のアドバイスを受けたり、本で知識を広げたり、板書の構成を考えたりと、私なりに工夫をしていますが、まだまだ納得ができる授業に達していません。そうしているうちに、あっという間に1学期が終わってしまいました。しかし、うまくいかなくても、「自分がなりたかった教員という仕事がそんな簡単に上手くいったら面白くない！」と考え、どうやったら上手く授業ができるか、どういう話題が生徒を夢中にさせるのかを考えることで、毎日がとても充実しています。その上、磯辺高校はともしっかりとした生徒が多くて、授業で生徒に助けてもらう場面もたくさんあります。

今後は一日でも早く一人前になり、生徒の成長に貢献できるような教員を目指して努力を続け、全力で生徒にぶつかっていきたいと思っています。